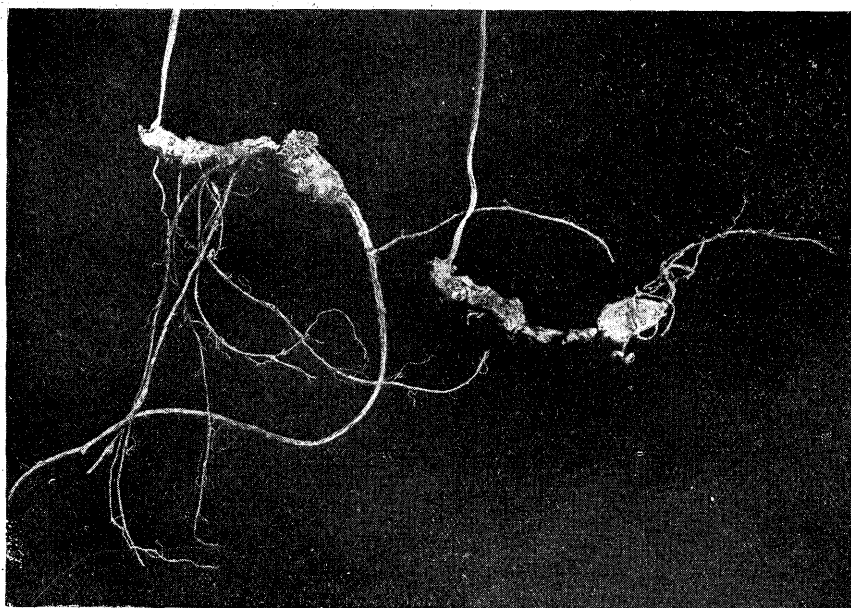


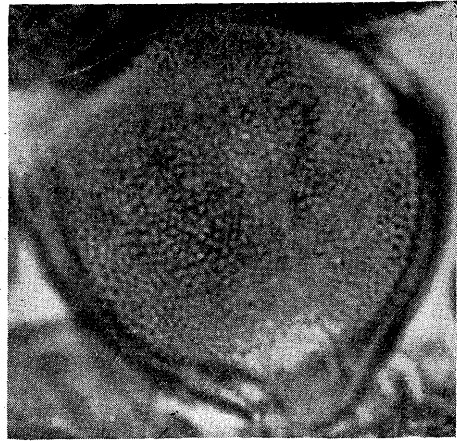
〇トチバニンジンの根 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: On the root of *Panax japonicum*.

トチバニンジン (*Panax japonicum* C. A. Mey.) とニンジン (*P. Schin-seng* Nees) とを地上部分で識別することは容易でない。ニンジンとは神農本草経の中で上薬に列しているのに、古来本草家の関心事の一つであつたため、本草綱目啓蒙にしろ、本草通串にしろ、これに多くの紙数を費し、類似品との比較のため多大の努力をしている。啓蒙の如き和漢のものはもちろん、フランスの文献やカナダ産のものまで参照していて当時としては相当な骨折りであつたに相違ない。そのうちでも、トチバニンジンとの区別については大変な注意をしたようで、前記本草文献はもとより、更に近代的な草木図説などは異口同音に実の形状の相違を指摘し、ニンジンの実は扁円、トチバニンジンのそれは球形であると述べているが標本ではわかりにくい。しかし、地下部を見ればニンジンでは根莖に該当する部分極めて短く貯蔵根然たる直根を有するのにトチバニンジンでは竹の根莖のような、いわゆる竹節状根莖が発達している。そうして、後者について多くの著者たちはいずれもこの横走せる竹節状の根莖のこのみをかいている。しかし、トチバニンジンと雖も、数年生の幼本では明かに直根を有し、その先端から竹節状根莖が発出しているが、老本になるにつれて、根莖部が発達して遂に直根は消失するので、

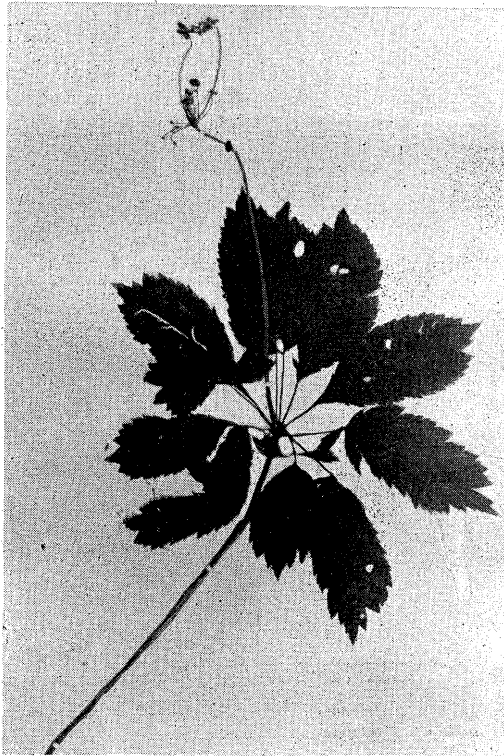


第1圖 トチバニンジンの地下部

普通に採集して来たものは大い根部を伴っていない。このことについては資源植物事典には一応かいておいたが、これを証明し得るようなものを1947年に上州伊香保でとつていたので、その写真をかかげておくことにした。普通幼本で、まだ花をつけるに達しない程度のものを注意して掘ればどこでも手に入れることができる。昔の人も之に気がついていたと見え、草木図説にも「延長根ノ末円長塊結ヲナス」とか「直根ノモノ経年久ニ至ツテ延長鞭ヲナスニ至ルモノアレバ」などとかいてあ



第2図 ニンジンの花粉の網紋を示す ca. ×800



第3図 トチバニンジン の 畸 形

る。同じようなことだが、本草通串にも「直根円根横根ノモノアリ横根ノモノハ形竹鞭ノ如クシテ叢多シコレヲ竹節人參トモ節人參トモ呼フ円根ノモノハ形珠ノ如シコレヲ珠人參トモカブラ人參トモ呼フ」とある。本草図譜第1巻の吉野人參なども、この珠人參とも思われるので通串の記事は或はトチバニンジン of 幼本とも考えられる。いずれにせよトチバニンジンでは幼本時代には直根を有し年を経るにしたがつて貯蔵根としての役目が終れば腐朽消失し、老本になるに及んで竹節状根莖のみになり根莖の節から根を発するのは事実である。花粉は発芽孔3個をもつもの (tricolporate) で表面に網紋がある仲間であるが、その網紋模様がトチバニンジンでは一層こまかく、かつ大

いさが少し小さいので、別種として区別できる。即ち人参の花粉は極面から見た直径が約 30μ なるに、トチバニンジンでは約 28μ で、また網紋間の空間 (lumina) の直径は前者では 0.5μ なるに後者では 0.2μ である。これは地上部で可能な区別の一と考えられる。葉片の形状や、実の色は品種の区別にはなるが種の区別にはならない。もしそれ第3図の様なになると畸形的存在に外ならない。学名は *P. repens* Max. が用いられた時代もあるが今では *P. japonicum* C. A. Mey. が用いられる。そのことについては故中井博士が Journal of Arnold Arboretum 5 卷 (1924) p. 34 にかいている。

Panax japonicum C. A. Mey. has a small tap root while young, but it perishes when the rhizome develops. As a rule in older plant the root is unrecognizable. Of the pollen grains, those of *P. Schin-seng* are larger than those of *P. japonicum* and the reticulation coarser.

○ギョウジャノミヅの名稱 (小清水卓二) Takuji KOSHIMIZU: Japanese meaning of Gyojano-mizu (*Vitis flexuosa* Thunb.)

ギョウジャノミヅ *Vitis flexuosa* Thunb. の名は、その昔行者が山野を跋涉する際に、水に渴するとこの蔓を切つて、この蔓から出る水を呑むので「行者の水」の名がつけられていると聞かされていたが、われわれが四季を通じて何回となくこの蔓を切つても渴をいやすに足るだけの水がとうてい出てこないで、不思議に思い、且つはその真疑をうたがつていた。

